地域連携意識はどのように形成されるのか

―世代間交流を通して地域・近隣意識のあり方について調査研究を行う―

岡田　史　　（介護福祉士　新潟県介護福祉士会会長
新潟市大山台高齢者福祉センター主査）
田村節子　　（介護福祉士　デイクラブさつき相談員）

<要　旨>

近年、地域でのさまざまな伝承事が薄く消えようとしているようである。時代の激しい変化の中で、価値観や、世代意識の相違が顕在化し、手間のかかるもの、無駄と思われるものは、人々は普段の生活の中であまり気にかけなくなった。それらの中には、地域の連携をなくしては実現できないものが多く、人間関係や、世代間の交流の希薄になっている今、地域住民の慣例的な行動だけでは維持できないものも多い。近年、それらを地域に呼び戻したいという流れも見られるようになってきたのは、人々が地域で暮らし続けるための知恵として感じ始めたのではないだろうか。新潟県介護福祉士会の実施する、地域貢献事業デイクラブさつき（介護保険事業のデイサービスとの違いを明確にするため、デイクラブと称している）の参加者の地域についての意識調査をおこなった。このような地域交流事業へ参加することによって意識にどのような変化が見られたか、地域において、高齢となっても障害を持っても暮らし続けるにはどのようなことが必要なのか、この実践研究によって探りたいと考えた。

<キーワード>

地域、郷土料理、世代間交流、ボランティア、だれでも、

【はじめに】

子育て、介護、教育、生活に関するすべての生活行為は地域との関係を抜きにしては語ることはできない。新潟県介護福祉士会は介護福祉士の国家資格を持つ者の職能団体である。その倫理綱領には、「地域福祉の推進」を掲げており、また、会則には専門職としてのボランティアに関することを定めている。本事業はこのような当会の方針に基づいて進められたものである。

【事業内容紹介】

当会では、在宅における介護問題の研究研修のため、新潟市内に一般的な民家を借用して、在宅介護研修センターを設置した。ここでは以下の事業を実施している。

1、会員が在宅介護での実践的な介護技術を研究開発するための研究会
2、在宅介護者を支援するため介護相談
3、在宅介護者支援を目的とした「ふれあい介護講座」
4、介護職への希望者を支援するため、訪問介護員２級過程研修
5、地域での生活問題を研究するため、高齢者だけではなく、子育て中の親子やすべての

人に門戸を開いた手作りのデイサービス事業（当会では介護保険事業との違いを明確にするためデイクラブ事業と称している）

6、訪問介護員のための訪問介護で役立つ実践調理支援講習会

地域でこのような事業がどのように受けとめられ、地域介護力向上への効果の程はどうか、そしてそれが地域連携意識の形成への動機づけとなりうるかを、デイクラブ事業への参加者を対象として、調査をおこない考察した。

【地域の概要】

新潟市の本馬越及び中山地区は昭和４０年代から開発が進んだ、新潟市のベッドタウンである。建築後３０年程度の住居が多く見られ、当会センターのある町内会の構成も１１世帯のうち３世帯を除いてはすべて６５歳以上の高齢者のみの世帯となっている。位置的には、新潟駅から南へ徒歩 30 分（住所：新潟市本馬越）ここ 30 年で住宅地として農地が開発された地域である。

新潟市は、面積 231.91 平方キロメートル、人口５１３２１７人、１９６２１４世帯、人口増加率０，１％、６５歳以上が１７．６％を占めている。

【調査対象者】

古い民家を無料で借用し実施したデイクラブ「さつき」参加者（当会ではデイクラブ事業と称し、介護保険事業との違いを明確にしている）。本事業は平成１４年５月１６日より毎週水曜日午前９時から午後４時まで開き、自由に過ごしていただくものである。そこでの参加者を対象に調査を行った。参加者は、地域住民、医療短大学生、専門学校学生、当会訪問介護研修修了者である。地域住民は歩いて通える人から、タクシーで通ってくる人、その調査の媒介に郷土料理を用い、その味覚や雰囲気をともに分かち合うことによって、これからの地域生活を考える上で、何かヒントになるもの、可能性として考えられるものを模索したいと考えた。

【調査内容】

事業実施機関　２００１年５月～継続中

調査実施時期　２００２年５月１日～31 日

調査票配布数　３２部

調査回答数　　２５

1、性別

2、年齢

3、住居所在地

4、家族数

5、デイクラブ「さつき」参加期間

6、活動内容について感想

7、出身について

8、郷土料理について

9、みなで食事を囲む感想

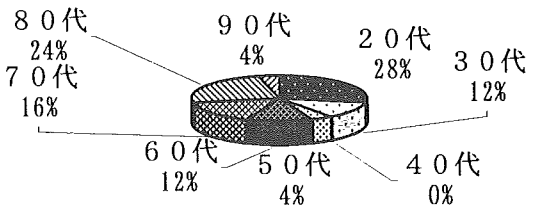
10、近隣との交流について

11、年齢の離れた人との交流について

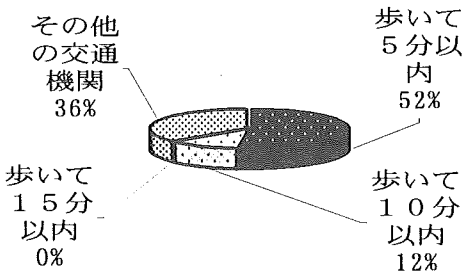
【調査結果】

1、性別については全員が女性の参加者であった。

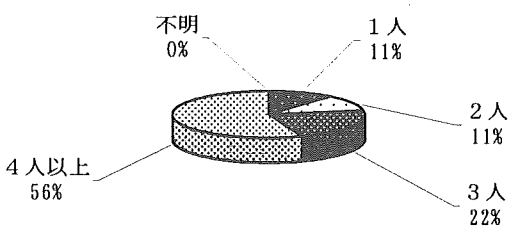
2、参加者年齢構成



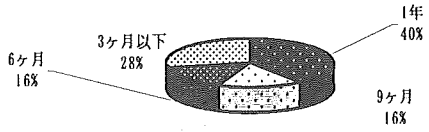
3、住居所在地



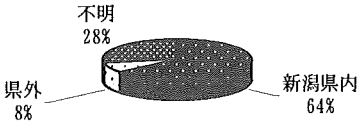
4、家族数



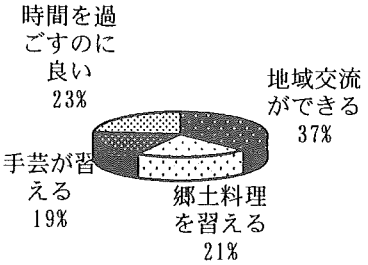
5、デイクラブ「さつき」参加期間



6、出身について



7、デイクラブ「さつき」活動内容について感想（複数回答）



8、郷土料理について

参加者は、郷土料理をみなで作り、食べる中で、さまざまな家庭によって同じ料理でもこだわりや手法のあることを、確認しあった。普段は郷土料理と意識しない料理も、この地方独特のものであることが、県外出身者の話から理解できることもあった。

9、みなで食事を囲む感想

全体的に薄味の料理が多かった。郷土料理といえば濃い味付けで、漬物や保存食といったものがイメージされるが、素材の味わいを大切にした献立で、全員おいしいという回答が得られた。

10、近隣との交流について

近隣との交流については全員必要との回答であった。また、この事業に参加するようになって近隣の高齢者への意識に変化が見られたかという質問を設けたが、無回答もしくは変化がないという回答であった。

11、年齢の離れた人との交流について

全員が好むという回答をしていた。

【考察】

毎週水曜日には平均 30 人の参加者が、来られる。利用者、スタッフ、ボランティアという役割はここには見られない。参加目的は、友人に何の気兼ねもなく会える、介護福祉士会会員としてボランティア活動ができる、おいしい昼食をみなで食べられる、手芸ができる、時間が過ごせる、さまざまである。

参加者の年齢構成を見ると、３０代の子育て

中の母親、５０代の子育てを終えた年代、60歳以上の人生の円熟期を迎えた年代の参加が多くみられた。20 代の参加者は、必要としての参加ではなく、学習としての参加であった。

住居所在地は 5 分以内の近隣者が多かったが、車やタクシー公共の交通機関利用者も見られた。これは、この地域から引っ越していったが、この地域に遊びに来る手立てに利用した人、どの福祉施設のデイサービスを利用しても、なじむことができず、心配した会員のケアマネジャーが試行的に利用することをすすめ、ここなら良いと参加されている人、友達と落ち合う約束をして水曜日はここに来ると決めている人、がみられた。

家族数は意外に独居が少ない。参加者の会話を聞いていると、家族関係のガス抜きをしているような面もみられた。控えめながら、互いに家族についての悩みの相談をしあっている参加者も見られた。また、夫婦での参加を勧めても、「男は損ですね、参加できなくて」と最初から男性は参加しないものと決め付けているような、言葉が聞かれた。ある独居の高齢者は、最初は、今まで生きてきた苦労話が会話のほとんどであったが、皆と交流する中で、新しい若い演歌歌手の歌う歌を覚えたいと、参加者の中に積極的に入っていくようになった。郷土料理については、自由記入の欄に「家ではできない料理を食べることができる。」「手作りが食べられる。」「大勢で食べることができて楽しい。」「作り方を習うことができ、いろいろな智恵がいただける。」「みなで仕上げる喜びと、大勢でいただく楽しさ。」「普段は子供と二人で食べているので、大勢でたべることは楽しい。」「さつきでこのように楽しく食事できるのも長生きしたおかげです。」以上のような記述が見られた。ほとんどの参加者が地域交流について肯定的な考えの持ち主であった。今回の調査研究では、それらに参加される地域住民や会員の意識を調査し、地域社会での生活や個人のあり方について、地域連携意識の形成について、研究を行いたいという考えのもとに実践と調査をすすめた。新潟には、伝え続けたい郷土料理が多く、その内容は温かで素朴で美味しいものが多い。本来それらは家庭の味として伝えられるものだが、現在の食生活の形態や価値観はその機能を持てないでいる。手作りのデイサービスや地域の茶の間活動は、近年盛んになってきている。このような場所が地域交流の場となり、その伝統が継承される場所になることができないだろうかというのが、本調査に取り組んだ発端である。「さつき」の参加者で、今、伝えたい郷土料理ということで、話し合い献立を決定した。最初は笹団子を作りたいという希望があり、５月は笹団子に決定する。６月は夏のっぺ、７月はぜんまいの白和え、８月はうち豆と干し菜の煮物、９月きのこご飯、１０月のっぺ、１１月菜飯、１２月寒ぶり(新潟の正月料理)刺身という献立内容である。それぞれ参加者の得意とするところで担当を決め、材料や調理方法や事前の打合せをしていただいた。

地域への広報は、外壁に掲示を行い誰でも参加できるように呼びかけた。参加者が事業開始からの参加者だけではなく途中からも参加者できるよう、そのつど掲示板に誰でも参加できることを繰り返し掲示した。

子供たちは最初、何かしなくてはという気構えがあり、幼稚園で習った遊戯を見せたりしていたが、時が経つにつれ自然に過ごすようにな

った。母親たちが料理や手芸を習っている間、退屈そうに絵本を読んだり、庭の草花に悪戯をしたり、騒いだり、時には他の参加者から注意されたりしたが、過ごし方としては子供たちにも無理のない過ごし方ではないかと感じている。

ある日の昼の献立

最初は郷土料理の伝承から、地域や世代間の交流をはかることが目的の事業であったが、子供たちや、子育て中の母親たちも、食事時間をともに分かち合う人がいることが、このように食べ物をおいしくするのだということを実感として気づいたようである。その後、若者世代の参加者からは、遠く離れた父母の介護の悩みの相談があったり、単にそこに参加しただけではない自己開示や交流が見られた。このような事業に参加する人々は、もともと地域への関心が深く、特にこの事業に参加してその視点に変化が見られたという言葉はないが、食事の談話の中で、「ここで皆と食事をともにするようになって、参加している人だけでなく、いつも歩いている人が見かけなくなるとどうしたんだろうと思うようになったわ。」という声が聞かれた。参加者の中にはこのような気持ちの変化が見られている。

【最後に】

デイクラブ「さつき」を実施している建物は30 年程度経過した古い建物で、外構にスロープを、玄関に手すりを設置しているほかは特に手をかけていない。通ってこられる方の中には老人車を押してやっと歩いてこられる要介護の認定をうけ、福祉施設のデイサービスを利用している方もいらっしゃる。しかし、皆生き生きと元気である。

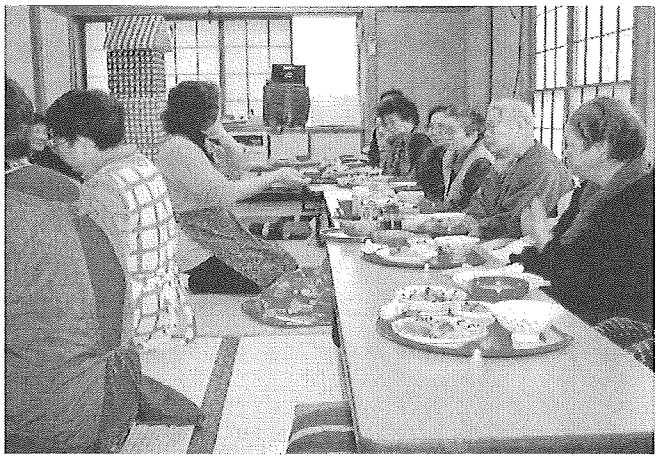
事業の中心を担っているのは、主に６０代から８０代の女性である。が、一人一人の参加者が何か役割を持てるように配慮して、その日の過ごし方を組み立てている。まず、集まってお茶を飲みその日の挨拶から始まる一日は、気持ちよく、自分より高齢の参加者の元気さや、人生観に触れることで、少し若い参加者（７０代）は自分の老後の生活を考え学習する機会となっている。

今回の研究において食事にこだわったのは、ただ、食事を栄養の摂取やカロリーの摂取というような考え方に私たちは陥ってはいないだろうか、この食事の中に文化や人間の活力や、社会性や様々なものが内包されているのではないだろうかと考えたからである。郷土料理の継承ということを切り口にして、食事の大切さを学んで行く中で、食事を作る時のわくわくする気持ちを共有することによって、地域の連携意識を形成したいという意図的な取り組みであった。場所や期日を、さつきの掲示板で知らせることで、ちょっと見てみようかという気持ちが、継続した参加となっている。特にプログラムは設定していないが、決めて行動する以上に、さまざまなメニューに対応できるような準備もしており、施設を開放するだけの事業では

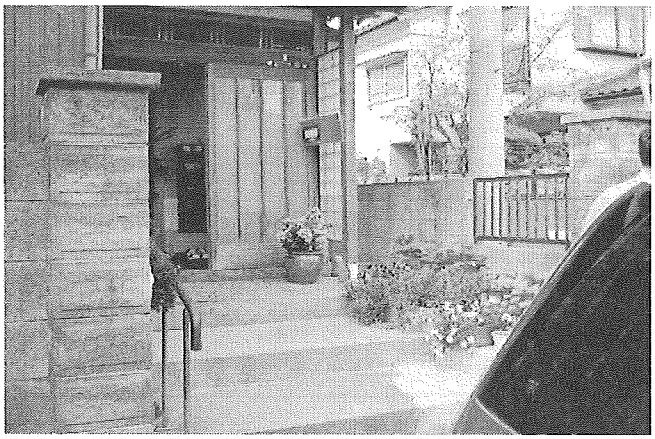
ない。ここでは、参加者であるということで、一日の流れを縛るものは何一つない。それぞれが役割を見出し、担っている。そして、誰かが誰かにおこなうものではなく、自分のためにおこなうことであるという考え方に徹しており、参加高齢者の排泄介助を一度おこなったからといって、それ以上の介助をおこなう立場ではないという個人のわきまえが定着している。それが、個々の人格を尊重することになり、参加者同士が対等な連携を築くことにつながっている。現在も、このたびおこなった事業が、終結することなく、「郷土料理の会」として、現在も継続して実施されている。

最後に、今回、実践研究助成事業として認め、多額の助成をくださいました、財団法人　安田生命社会事業団様に参加者を代表して感謝を申し上げます。

車いす乗り心地体験



食事風景



さつき玄関

子供たちの参加